

保育者養成課程に所属する学生が子どもに飼育させたい生き物とその理由
－学生の自由記述分析－

Analyzing why students of early-childhood education course want children
to experience raising creatures through free descriptions

鶴 宏史, 藤本 勇二, 岡田 朱世

TSURU, Hirofumi FUJIMOTO, Yuji OKADA, Akeyo

武庫川女子大学 学校教育センター紀要

第7号 2022年

【研究報告】

保育者養成課程に所属する学生が子どもに飼育させたい生き物とその理由
—学生自由記述分析—

Analyzing why students of early-childhood education course want children to experience raising creatures through free descriptions

鶴 宏史*

藤本 勇二**

岡田 朱世***

TSURU, Hirofumi*

FUJIMOTO, Yuji**

OKADA, Akeyo***

要旨

本研究の目的は、保育者養成課程に所属する学生が子どもに飼育させたいと考える生き物が何か、そしてその意図を明らかにすることである。保育士養成課程に所属する女子大学生 188 名を対象に、4 歳児か 5 歳児に飼育させたい生き物は何か、そしてその生き物を選択した理由について質問紙調査を行った。結果、学生が子どもに飼育させたい生き物は 25 種類で多い順にウサギ、チョウとカブトムシ、カエルであり、生物の分類で整理すると多い順に節足動物（昆虫類）、哺乳類、両生類であった。その生物を選択した理由は 20 に分類でき、多い順に「子どもでも容易に飼育できるから」、「成長の過程・変化を見ることができる生き物だから」、「生命そのものや生命の尊さを実感したり学んだりできるから」、「子どもに危険がなく安全だから」であった。これらの理由は、主に領域・環境のねらいと内容に関わるものでその他に領域・人間関係や養護のねらいと内容に関するものがみられた。

キーワード：保育者養成課程 学生 生き物の飼育 領域・環境 領域・人間関係

1. 本研究の背景と目的

(1) 幼稚園、保育所、認定こども園における生き物やその飼育の位置づけ

生き物の飼育は、幼稚園や保育所、認定こども園において、様々な教育効果を期待されて行われてきた。幼稚園教育要領などで示される「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のひとつに「自然との関わり・生命尊重」があり、「自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気づき、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることを覚えるようになる」とある。

また、幼稚園教育要領の領域「環境」の中には、保育の「ねらい」として「身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ」ことがあげられており、その「内容」の (1) には「自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く」、(5) には「身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気づき、いたわったり、大切にしたりする」と示されている。さらに、「内容の取扱い」の (3) において、身近な事象や動植物に対する感動を伝え合い、共感し合うことなどを通して自分からかかわろうとする意欲を育てるとともに、様々なかかわり方を通してそれらに対する親しみや畏敬の念、生命を大切にすることを覚える、公共心、探究心などが養われるようにすること」と示されている。

さらに、幼稚園教育要領の領域「人間関係」の「内容の取扱い」の (3) において、「道徳性の芽生

* 教育学科教授 ** 教育学科准教授 *** 教育学科非常勤講師・大阪キリスト教短期大学助教

えを培うに当たっては ― 中略 ― 自然や身近な動植物に親しむことなどを通して豊かな心情が育つようにすること。特に、人に対する信頼感や思いやりの気持ちは、葛藤やつまづきをも体験し、それらを乗り越えることにより次第に芽生えてくることに配慮すること」とある。

保育所保育指針や幼保連携型認定こども園教育・保育要領でも同様のことが示されており、生き物に触れ、飼育する経験は、幼児期の子どもたちにとって重要なことであり、多くのことを学ぶ機会となるよう期待されている。

(2) 保育者志望学生・保育者と生き物

子どもが身近な動植物に親しめる環境を整えるためには、幼稚園教育要領解説に示されるように、「親しみやすい動植物に触れる機会もたせる」ことに加えて、保育者などが「世話をする姿に接することを通して、次第に身近な動植物に親しみをもって接するようにし、実際に世話をすることによって、いたわったり大切にしたりしようとする気持ちを育てる」ことが大切である。

しかし、保育者志望学生や保育者の中には、哺乳類や鳥類などの動物は好きでも、昆虫などにかかわることに抵抗を感じる者も多いことが指摘されている。例えば、栗原と野尻 (2008)^①による保育者養成課程の女子大学生を対象にした調査によれば、約 70%の学生がウサギやモルモットなどの小動物は好きだと回答しているのに対して、約 60%の学生が昆虫に嫌悪感を抱いており、その理由として「気持ち悪いから」「怖いから」が挙げられた。また、野尻、今井と栗原 (2009)^②は、保育者志望の学生を対象にした調査によれば、女子学生は男子学生よりも、現在好きな昆虫がいない傾向が強く、嫌いな昆虫の中でも特に「蛾」との関連性が強くあらわれていることが明らかになった。また女子学生が昆虫を嫌いだとする理由は、男子学生よりも自らの経験から生まれた感情面で捉える傾向にあることも明らかになった。ただ、江島の調査 (2009)^③のように、学生自らの経験と生き物に対する苦手意識の関連はあまりないことを示す研究もある。

また、上原 (2020)^④は、保育者養成課程の女子大学生を対象に調査を行い、保育所や幼稚園で子どもたちと一緒に飼育してみたい生き物を質問したところ、哺乳類と魚類に学生の 50%以上が哺乳類と魚類を選択し、昆虫類は 30%台、爬虫類や両生類、ダンゴムシなどについては 20%台であった。そして、それらの生き物を飼育したい理由として、「生き物に対する責任や命の大切さを学んでほしい」と「生き物に興味を持ってほしい」が多く、「自分が好き」、「小さい頃に飼っていたから」、「自分も触れるから」という回答が一定数あったことを明らかにした。

田川、新井と石田 (2018)^⑤は、調査を通して、保育者・教員養成校の学生の虫嫌いを緩和する方法として、昆虫の安全性について正しい知識を提供することと、昆虫と実際に触れ合う活動を取り入れ、ポジティブな感情が生まれるきっかけづくりをすることが有効であることを提案する。そして、昆虫観察会を実施することで、学生の昆虫嫌いの緩和に一定の効果があつたことを報告している。

現職の保育者に関しては、平田と小川 (2018)^⑥による調査によれば、哺乳類や鳥類などの動物については好きな傾向を示す保育者が約 70%と多く、昆虫やそれ以外の節足動物を含む虫については嫌いな傾向を示す保育者がやや多いことが明らかになった(虫嫌い傾向が約 48%, 虫好き傾向が約 34%)。ただし、虫が嫌いな傾向や虫を触ることが苦手な傾向であっても、子どもたちとともに虫取りなどの活動を行っている実態も明らかとなった。

(3) 本研究の目的

先行研究より、学生が養成校において生き物の飼育を行うことは重要な学びになるだけでなく、生き

物、特に昆虫などに対する嫌悪感の緩和につながる事が明らかになった。その際、学生が子どもと一緒に育てたいと考える生き物や学生自身が飼育した生き物を飼育するとより効果的と考えられる。さらに生き物の生態や飼育の仕方の理解にもつながるだろう。そこで、本研究では、保育者養成課程に所属する学生が子どもに飼育させたいと考える生き物が何か、そしてその意図を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

(1) 調査対象

武庫川女子大学教育学部教育学科に所属する「保育原理」の受講者（2020年度および2021年度の受講者）を対象に調査を実施した。2020年度の受講者は89名、2021年度の受講者は99名の合計188名である。なお、対象となる学生は領域・環境に関する授業⁽¹⁾を受講していない。

(2) 調査手続き

「保育原理」の授業中に学生の以下の課題を取り組んでもらった（自由記述形式）。

課題1：あなたが4歳児クラス、あるいは5歳児クラスの担任と仮定して、子どもたちに飼育させたい生き物を1つ記載する。基準は、保育所や幼稚園で飼育できそうな生き物である。

課題2：その生き物を選択した理由を記載する。

(3) 分析方法

以下のような分析を行った。

- ① 記載された生き物を同じ種類ごとに分類し単純集計を行った。
- ② 記載された生き物を生き物（動物）の分類に基づいて整理した。
- ③ ①で選択された生き物を選択した理由を内容の類似性に基づいて分類した。

(4) 倫理的配慮

課題を取り組む際に、課題の内容を研究で使用すること、課題の内容の使用にあたっては個人が特定されない配慮をした上で公表すること、使用することを拒否してもよいことを書面と口頭で説明し、受講生の同意を得た。

3. 結果

188名全員が課題を提出するとともに、全員が研究の課題内容を使用することに同意した。

(1) 子どもに飼育させたいと考える生き物

学生が子どもに飼育させたいと考える生き物は表1の通り、25種類の生き物であった。最も多かったのはウサギで36名(19.1%)、次いでチョウ(アオムシなどを含む)とカブトムシが33名(17.5%)ずつ、カエル(オタマジャクシを含む)が26名(13.8%)であった。

次に、学生が飼育させたいと考える生き物を、表2のように生物の分類で整理した。最も多かったのは節足動物(昆虫類)の74名(39%)で10種類の生き物、次いで哺乳類の41名で5種類の生き物が挙げられた。

表1 学生が選択した生き物

生き物	数
ウサギ	36
チョウ/イモムシ/サナギ	33
カブトムシ	33
カエル/オタマジャクシ	26
カタツムリ	10
キンギョ	9
ダンゴムシ	9
メダカ	8
カメ	6
ニワトリ	2
ハムスター	2
アカヒレ	1
アメンボ	1
アリ	1
カイコ	1
グッピー	1
クワガタムシ	1
ザリガニ	1
テントウムシ	1
バッタ	1
ホタル	1
ミニブタ	1
モルモット	1
ヤギ	1
ヤゴ	1

計 188

(2) 当該生き物を選択した理由

学生が飼育したいと考えた生き物を選択した理由について、424の記述があった（一名が複数回答しているため）。選択理由の内容の類似性に基づいて分類した結果、表3に示す通り、20の理由が浮かび上がった。最も多い理由は「子どもでも容易に飼育できるから」で108名、次いで「成長の過程・変化を見ることが出来る生き物だから」で72名、「生命そのものや生命の尊さを実感したり学んだりできるから」で51名と続いた。以下、5名以上が答えた結果の詳細を示す。なお、イタリック体は学生の記述内容である。

1) 子どもでも容易に飼育できるから

学生は、幼稚園や保育所で子どもたちが簡単に飼育できる生き物を子どもたちに育ててもらいたいと考えていた。

- ・キンギョは実際に私が幼い頃買っていたが、とても飼育しやすかったのを覚えている。
- ・ダンゴムシは子どもにとっても飼育しやすいと考えたため。餌も子どもたちが調達できるような枯葉などだから。
- ・チョウチョは噛んだり毒があるなどの危険な生物ではなく、比較的飼育しやすいため生き物の飼育を初めてするような子どもにはぴったりであると考えた。
- ・アメンボは子どもたちにとって飼育しやすいと思い選んだ。
- ・メダカは餌やりが難しくなく、工夫をすれば水槽の水換えも難しくないと考え、飼育しやすいと思ったからです。

2) 成長の過程・変化を見ることが出来る生き物だから

学生は、子どもたちに成長の過程や変化が分かりやすい生き物を育ててもらいたいと考えていた。つまり、例えば、卵→幼虫→蛹→成虫のように変態する生き物を選択していた。

- ・カブトムシを幼虫から飼って成虫になる成長の過程を観察することで、子どもたちの新たな発見や考察力の発達が見られると思いました。
- ・イモムシは成長に応じて見た目が大きく変わっていく。イモムシ→サナギ→チョウと成長が分かれている。自分たちで育てた生き物の成長が目に見えることで子どもたちは深く興味を示すと思う。さらに毎日観察することで変化に気づき、たくさんの発見をできるだろう。

表2 学生が選択した生き物（生物の分類）

分類	記載された生き物名	総数
節足動物（昆虫類）	チョウ、カブトムシ、アメンボ、アリ、カイコ、クワガタムシ、テントウムシ、バッタ、ホタル、トンボ（ヤゴ）	74
哺乳類	ウサギ、ハムスター、ミニブタ、モルモット、ヤギ	41
両生類	カエル	26
魚類	キンギョ、メダカ、アカヒレ、グッピー	19
節足動物（甲殻類）	ダンゴムシ、ザリガニ	10
軟体動物	カタツムリ	10
爬虫類	カメ	6
鳥類	ニワトリ	2

計 188

表3 学生が表2で選択した生き物を選んだ理由

選択理由	数
子どもでも容易に飼育できるから	108
成長の過程・変化を見ることができる生き物だから	72
生命そのものや生命の尊さを実感したり学んだりできるから	51
子どもに危険がなく安全だから	35
身近に感じ親しみをもちやすいから	32
生き物の特徴や生態を知ることができる・知ってほしいから	28
生き物（他の生き物含む）への興味・関心を深めてほしいから	23
子どもが興味・関心を持ちやすい生き物だから	14
責任感を育むことができるから	12
子どもが捕獲できる生き物だから	8
生き物に対する愛着や愛情を持ってほしいから	7
子どもが触れることができるから	7
他の活動とつながりやすいから	7
飼育をする喜びや達成感を味わえるから	6
生き物を取り巻く環境など関連することにも興味を持ってほしいから	4
飼育を通して子ども同士の関わり合いや思いやりが育つから	3
友達と協力や交代して飼育できるから	3
自分が飼育したことがあるから	2
子どもの心を癒すから	1
子どもが見ていて飽きないから	1

計 424

- ・幼虫から飼うと、羽化を観察することができる考えたため。そのため、イモムシが羽を持った成虫（クワガタ）になって出てくる体の変化に興味を持つことができる。

- ・カエルは卵からオタマジャクシ、そしてカエルというように体に変化するので目に見えて成長するのでわかりやすく、楽しく飼育できると考える。
- ・毎日観察することで、突如後ろ足が出てきたり、しっぽのような部分が大きくなってきてしっぽではなくなったり、頭が大きくなったりなどオタマジャクシからカエルへと成長する過程を簡単に見ることができ、オタマジャクシの体の形とカエルの体の形には大きな差があるため、見ていてとても面白いと思い、子どもたちの興味を引けるのではないかと思ったから。

3) 生命そのものや生命の尊さを実感したり学んだりできるから

学生は、選択した生き物の飼育を通して子どもに生命をというものを実感してもらったり、生命の尊さを学んだりしてほしいと感じていた。

- ・ウサギは実際に触れ合うこともできるため、動物のぬくもりを感じることができ、「生」を実感することができる。
- ・カエルは、卵からおたまじゃくし、カエルへと次々に姿を変化させる。育てていく中で亡くなってしまうものもあれば、足や手が徐々にできて、カエルに近づいていくものなど様々であるので命の尊さを実感する。
- ・私は幼稚園の頃、家でキンギョを飼っていた。お祭りのキンギョすくいでゲットしたキンギョを毎日お姉ちゃんとエサやり当番を決めて育てていた。そして、死んでしまった時はお姉ちゃんと一緒にずっと「死なないで！頑張れ！！」と言い続けたのを今でも鮮明に覚えている。これをきっかけに、生き物の大切さや生命の大切さ、そして自分の任された仕事をしっかりとこなすことを学ぶことができたからだ。
- ・グッピーは成長がはやく、産卵期にはたくさんの子供が産まれるため、生命の尊さや面白さを実感できると思うから。
- ・カブトムシは一生のほとんどを幼虫のまま、成虫になって数ヶ月で亡くなってしまふのだが、幼虫の時期が長い分成虫になった時に感じる嬉しさやカブトムシへの愛情、命の尊さなど多くのことを学べると思ったから。

4) 子どもに危険がなく安全だから

学生は、子どもたちが生き物を育てる際に、子どもたちに危害を及ぼさないことを念頭に選択をしていた。

- ・ウサギは飼育をする上で、さまざまな利点がある。 — 中略 — あまり咬むことがないため、安全でもある。
- ・オタマジャクシは小さくて育てやすく、危険がないと考えたため。
- ・カタツムリは身近に存在し、飼育にあまり手間がかからないため 4、5 歳の子供であれば世話ができて、触っても害がないところが観察しやすいと考えたため。
- ・カメはおとなしいため、餌をあげるのも危険が少なく、子どもたち自身が興味を持って餌をあげるができるだろうと考えたためです。

5) 身近に感じ親しみを持ちやすいから

学生は、子どもにとって身近な生き物や親しみやすい生き物を子どもに飼育させたいと考えていた。

- ・チョウは、子どもにとって公園などでよく見かける生き物だから親しみを持ちやすいと考えた

ため。

- ・ウサギは子どもにとって ― 中略 ― 草食動物なので危険性も低く、比較的大人しいので子どもでも親しみやすいと思います。
- ・カエルはよっぽどの都会でなければ身近にいる生き物でもあり、子どもたちも親しみやすいと考えたため。
- ・カエルは童話や歌によく出てくるため、子どもたちにとって親しみのある生き物だと考えました。

6) 生き物の特徴や生態を知ることができる・知ってほしいから

学生は、選択した生き物を飼育することでその特徴や生態を子どもに知ってほしいというねがいをもっていた。

- ・アリは子どもたちにとったら身近な存在であるが、巣の様子など知らないこともたくさんあり、観察することを通していろいろな発見ができると思ったから。
- ・動きが他の虫と異なり面白い。動きの他にもカタツムリ特有の習性があるため、興味深く観察することができる。産卵、孵化を見られる点でも様々な学びに繋がると考えた。そして食べたものの色をしたうんちが出るということなど、目に見える発見も楽しめると思った。
- ・オタマジャクシは、子どもたちが生活の中で陸上にはいない水の中の生き物で、水の中を見ないと発見できないので滅多に接することのない生き物だから、いろいろな発見ができると感じたからです。
- ・ウサギはにんじんを食べることで有名だが実際は他のものも食べることなど新しい発見をたくさんすることができると思う。

7) 生き物（他の生き物含む）への興味・関心を深めてほしいから

学生は、学生が選択した生き物を子どもたちが飼育することで、その生き物に加えて、他の生物にも興味は関心をもつことを考えて選択していた。

- ・オタマジャクシから足が生え、緑色（もしくは茶色）になりカエルの姿になっていくことに不思議さや面白さを感じ、カエルをきっかけに他の動物にも親しみを持ってもらえるから。
- ・カブトムシは ― 中略 ― 普段園庭にはいないが身近にいるような昆虫を育てることで、昆虫や魚なども含む動物への興味・関心が高まると思うから。
- ・キンギョにはいろいろな模様や種類があるからそこに子どもたちが気づいて、生き物に興味を広がるきっかけにもなるかなと思いました。
- ・メダカをのんびりみることができたり、水槽にたくさんのメダカをかうことによって魚への興味もわくのではないかな。

8) 子どもが興味・関心を持ちやすい生き物だから

学生は、子どもたちに人気がある、成長の過程の変化がみられるなど、子どもが興味や関心を持ちやすい生き物を飼育させたいと考えていた。

- ・ウサギは大きすぎないから怖がらずに触れ合うことができると思うし、もふもふしていて可愛らしさがあるから興味を持ってもらえると思うから。
- ・オタマジャクシからカエルへ成長していく姿は、子どもたちがとても興味を持ってくれるので

はないかと考えたからです。

- ・カタツムリは、園庭などで見かけたりすることが多い身近にいる生き物であると考えるので、より興味や関心を持ちやすいのではないかと考えたから。
- ・カブトムシは昆虫の中で有名でかっこいいというイメージがあり、興味を持って育てることができると思ったから。

9) 責任感を育むことができるから

学生は、子どもたちに生き物の飼育を通して、生き物を育てる責任感を育ませようと考えていたり、子どもたちがより主体的に飼育に参加しやすい生き物を選択し責任を持たせようと意図していたりした。

- ・ザリガニは 4, 5 歳児にも捕獲できるものであり、保育者が買って来た生き物より自分たちで捕まえたものである方が責任感を持って飼育ができると考えた。
- ・ダンゴムシは、はじめに飼育の方法を教えると、子どもたちだけでほとんどのお世話ができると思います。保育者がメインで飼育をするよりも、保育者が見守りながら、子どもたちがメインで飼育をしたほうが、生き物のお世話をきちんとするという責任感が出てくるのではないかと考えました。
- ・餌やりを当番制で実施することで、生き物に対する愛情が芽生え、生き物を育てることの責任を感じることができるのではないかと考えたのでメダカを選びました。
- ・ウサギを飼育する場合、エサをあげ、小屋の掃除を当番制で行うことで責任感の芽生えが期待できる。

10) 子どもが捕獲できる生き物だから

学生は、子ども自身で捕獲ができる生き物を選択し、子どもに捕獲から飼育までを経験させたいと考えていた。

- ・田んぼ等で子ども達自身が捕まえるところから体験でき、積極的に飼育に参加できる場所もカエルの良さであると思う。
- ・カタツムリは、葉っぱの裏やコンクリートの塀など園庭でも簡単に見つけることができ、気軽に飼うことが出来ると考えられるため。
- ・飼育する生き物としてザリガニが適していると考え。理由は自ら捕獲が可能であるという点だ。

11) 生き物に対する愛着や愛情を持ってほしいから

学生は、生き物の飼育を通して選択した生き物に対する愛着や愛情、生き物を大切にしたい気持ちを育んでほしいと考えていた。

- ・ウサギは — 中略 — 抱っこをしたり、直接触れ合ったりすることができるため、扱いやすく愛着が湧きやすい。
- ・モルモットは — 中略 — 感情を表す生き物なので、動物を大切にしたい気持ちがより深まるのではないかと考えたからです。

12) 子どもが触れることができるから

学生は、子どもたちが直接触れることができる生き物を飼育したいと考えていた。

- ・カブトムシは — 中略 — 加えて手が挟まれたり噛んだりしないので子どもたちが触れ合うこともできると考えました。
- ・カエルになった後も継続して飼育することができ、触ることもできるので面白いと思う。

13) 他の活動とつながりやすいから

学生は、飼育だけにとどまらず他の活動につながったり、遊びが展開しやすかったりする生き物を選択していた。

- ・カタツムリは子どもが飼育しやすいと思った。梅雨の時期の生き物でもあるので、手遊びや絵本などで関連しやすい。
- ・カメは — 中略 — 形がわかりやすいので、絵をかいたり物を作るのもしやすいと思った。

14) 飼育をする喜びや達成感を味わえるから

学生は、生き物の飼育を通して飼育をする喜びや楽しみ、あるいは達成感を味わってほしいと考えていた。

- ・ウサギは子どもたちにとって — 中略 — 馴染みのある動物だと思うし、直接手で触れ合うことができ、動物を飼うという楽しさを知ることができると思うから。
- ・カブトムシは成長過程において形が大きく変化するため、子どもたちにとっても分かりやすく、より成長を実感することができる（飼育をする喜びや達成感を味わえる）と考えた。

4. 考察

(1) 学生が子どもたちに飼育させたい生き物について

本研究で、学生が子どもに飼育させたい生き物は、多い順にウサギ、チョウとカブトムシ、カエル（オタマジャクシを含む）であり、生物の分類で整理すると多い順に節足動物（昆虫類）、哺乳類、両生類であった。

ウサギについては、栗原と野尻（2008）⁽⁸⁾の研究において保育者養成課程の女子大学生の約70%がウサギやモルモットなどの小動物は好きだと回答しており、また、上原（2020）⁽⁹⁾の研究において、保育者養成課程の女子大学生が保育所や幼稚園で子どもたちと一緒に飼育してみたい生き物として、半数以上が哺乳類を選択していた。本研究でもウサギは飼育させたい動物で最も多く、先行研究と一致しているといえる。飼育させたい理由についてはすでに述べておりここでは明示されていないが、学生自身がウサギに好意的なことも飼育したい理由ではないかと推測された。

生物の分類で整理した際に、最も多かったのは節足動物（昆虫類）であった。栗原と野尻（2008）⁽¹⁰⁾の研究では昆虫に対する女子大学生の嫌悪感が高い割合が示され、上原（2020）⁽¹¹⁾の研究では女子大学生が子どもと飼育したい生き物のうち昆虫類は30%台であった。本研究では、約40%の学生が子どもたちに飼育させたいと回答しており、上原（2020）⁽¹²⁾の研究と大差はなかった。本研究では、生き物の嫌悪について調査をしていないが、学生は昆虫の好き嫌いで飼育するかを選択しているのではなく、子どものために選択していることがうかがわれた。この点は両生類も同様のことがいえる。

(2) 学生がその生物を選択した理由について

学生が飼育したいと考えた生き物を選択した理由は、20に分類でき、多い順に「子どもでも容易に飼育できるから」、「成長の過程・変化を見ることができる生き物だから」、「生命そのものや生命の尊

さを実感したり学んだりできるから」、「子どもに危険がなく安全だから」、「身近に感じ親しみを持ちやすいから」、「生き物の特徴や生態を知ることができる・知ってほしいから」、「生き物（他の生き物含む）への興味・関心を深めてほしいから」であった。

上原（2020）⁽¹³⁾の研究において、保育者養成課程の女子大学生が保育所や幼稚園で子どもたちと一緒に飼育してみたい生き物を選択した理由として多いもので、「生き物に対する責任や命の大切さを学んでほしい」と「生き物に興味を持ってほしい」があり、本研究の結果とも一致している。逆に、上原の研究では、その理由として「自分が好き」、「小さい頃に飼っていたから」、「自分も触れるから」という回答が一定数あったことが明らかになっているが、本研究ではこれらの個人的な理由として「自分が飼育したことがあるから」が188名中2名のみの回答であった（本調査でも学生の記述の中には「飼育したことがある」が一定数見られたが、それを飼育の理由に挙げている学生は2名のみ）。あくまでも、子どもの立場で飼育の理由を考えていることが推測された。

さて、20の理由に分類できたわけだが、「子どもでも容易に飼育できるから」、「成長の過程・変化を見ることができる生き物だから」、「生命そのものや生命の尊さを実感したり学んだりできるから」、「身近に感じ親しみを持ちやすいから」、「生き物の特徴や生態を知ることができる・知ってほしいから」、「生き物（他の生き物含む）への興味・関心を深めてほしいから」、「子どもが興味・関心を持ちやすい生き物だから」、「子どもが捕獲できる生き物だから」、「生き物に対する愛着や愛情を持ってほしいから」、「子どもが触れることができるから」、「飼育をする喜びや達成感を味わえるから」、「生き物を取り巻く環境など関連することにも興味を持ってほしいから」、「子どもが見ていて飽きないから」は、生命や自然、生き物、飼育に関わる内容であり領域・環境のねらいや内容に関連するものといえる。

「責任感を育むことができるから」、「飼育を通して子ども同士の関わり合いや思いやりが育つから」、「友達と協力や交代して飼育できるから」は、子ども同士の関わりや他者へも思いやり、責任感に関わることから、領域・人間関係のねらいや内容に関連するものといえる。

「子どもに危険がなく安全だから」と「子どもの心を癒すから」は、前者が子どもの安全、後者が心身の疲れの癒しに関わるもので教育というよりは養護に関するねらいや内容が反映されている。また、「他の活動とつながりやすいから」は遊びの展開や複数の領域との関連を示すものといえる。「自分が飼育したことがあるから」は個人的理由として分類できる。

(3) 小学校教育との関連・接続について

幼児期に生き物に触れ、飼育する経験を通して子どもは多くのことを学ぶ。その育ちを小学校教育につなげる上で大きな意味をもつのが生活科である。小学校学習指導要領解説生活編には、内容(7)において、「育つ場所、変化や成長の様子に関心をもって働きかけることができ、それらは生命をもっていることや成長していることに気付くとともに、生き物への親しみを持ち、大切にしようとする」と飼育を通して育つ資質・能力が示されている。生き物への親しみを持ち、生命の尊さを実感するためには、継続的な飼育を行うことに大きな意義があり、植物の栽培と同様に2学年間にわたって取り扱うものとして重視されているのである。

小学校学習指導要領解説生活編には、飼育する動物として、「身近な環境に生息しているもの」「児童が安心して関わるができるもの」「えさやりや清掃など児童の手で管理ができるもの」「動物の成長の様子や特徴が捉えやすいもの」「児童の夢が広がり多様な活動が生まれるもの」が挙げられている。学生が子どもたちに飼育させたい生き物を選択した理由は、生活科で飼育する動物の条件に重なる。

っていると言える。保育者志望学生や保育者は、生活科で飼育する動物を選択する条件を見通しながら飼育活動に取り組むことが大切である。さらに、「児童の夢が広がり多様な活動が生まれるもの」に相当する、生き物を親しみと期待の目で見つめ、心を寄せながら世話をしたり、動物の立場に立って考えたり、交流・表現したりする学習活動を加えることで気付きの質が高まることを小学校教諭は自覚して生活科実践に取り組む必要がある。

小学校学習指導要領解説生活編では、飼育する動物名は具体的に挙げられていない。そこで、現行版の生活科教科書 8 社を比べると、ダンゴムシ (7 社)、ショウリョウバッタ/トノサマバッタ/コバネイナゴ/オンブバッタ (6 社)、コオロギ (6 社)、トンボ (ヤゴ) (6 社)、アゲハ/モンシロチョウ (6 社)、カブトムシ (3 社)、アリ (3 社) クワガタ、カマキリ、ナナホシテントウ、キリギリス (各 1 社) と、多くの節足動物が例示されていることが確認できる。学生が子どもたちに飼育させたい生き物として最も多くあげられ節足動物 (昆虫類) と重なっている。学生が、幼稚園、保育所、認定こども園において飼育することが想定できる生き物の飼育の経験は、生活科における指導の充実に結び付けることができると言えよう。

さらに、学生が子どもたちに飼育させたい生き物として多かったウサギやカエルについて、教科書では、モルモット (6 社)、ウサギ (3 社)、ハムスター (1 社)、ヤギ (1 社)、カエル (4 社) となっている。ウサギなどの哺乳類は、ぬくもりを感じたり常に解決しなければならない問題に出会ったりする価値がある。幼児期の経験を踏まえた生活科での飼育活動の充実が求められる。

生活科の教科書を見ると、魚類では、メダカ、キンギョ (各 1 社)、軟体動物では、カタツムリ (4 社)、ザリガニ (3 社) が示され、学生が子どもたちに飼育させたい生き物として挙げなかった鳥類のチャボ (1 社)、爬虫類のカナヘビ (1 社)、甲殻類のカニ (1 社) が示されていることも付記しておく。

5. 今後の課題

先行研究から生き物の生態や飼育の仕方を理解したり、生き物の苦手意識や嫌悪感を緩和したりするために、養成課程において学生が子どもに育てさせたいと考える生き物や学生自身が飼育した経験のある生き物を飼育するとより効果的と考えられた。そこで本研究では、保育者養成課程に所属する学生が子どもに飼育させたい生き物とその理由を調査し、子どもに飼育させたい生き物として、ウサギ、チョウ (アオムシなどを含む) とカブトムシ、カエル (オタマジャクシを含む) が上位を占めた。今後は、これらの生き物の飼育を養成校の教育内容に含めていくかの検討が求められるが、具体的教育方法や内容についての検討は今後の課題としたい。

研究の課題としては、本研究では学生の生き物そのものや生き物の種類ごとの嫌悪感、そして過去にどのような生き物の飼育経験があるかについて明らかにできなかったことである。学生自身の生き物に関わる経験が生き物の嫌悪感に影響するか否かは研究によって結果が異なっており、今後、明らかにしたい。また、本研究では学生の記述の中で幼児期や学童期に当該生き物を飼育した経験があることが一定数みられた。この経験と生き物の嫌悪感との関連や、学生がこれまでどのような生き物の飼育経験があるかについても明らかにしていきたい。

注・引用文献

- (1) 栗原泰子・野尻裕子「保育者養成学生の動物との関わりについて-動物への対応と幼児への援助について」『川村学園女子大学研究紀要』19(2), 2008, pp.27-38.
- (2) 野尻裕子・今井邦枝・栗原泰子「保育者養成課程学生のムシに対する好悪について」『川村学園女子大学研究紀要』

20(2), 2009, pp.17-25.

- (3) 江島絵理子「保育者養成校学生の動物に対する好悪と幼少期の動物に関する接触経験」『福祉と人間科学』(9), 2009, pp.65-67.
- (4) 上原隆司「飼育経験と苦手意識が保育学生の飼育したい生き物の選択に与える影響」『名古屋短期大学研究紀要』(58), 2020, pp.49-57.
- (5) 田川一希・新井しのぶ・石田靖弘「保育の領域「環境」において,保育者の「虫嫌い」を緩和し,身近な昆虫を保育に活用する方法: 保育者・教員志望の学生の昆虫に対する認識調査と昆虫観察会の実践を通して」『中村学園大学発達支援センター研究紀要』(9), 2018, pp.67-76.
- (6) 平田豊誠・小川博士「保育士を対象とした「虫」と「動物」についての意識調査」『佛教大学教育学部学会紀要』(17), 2018, pp.75-87.
- (7) 武庫川女子大学教育学部教育学科の保育者養成課程では, 2年生前期に「保育原理」が開講される。その後, 領域・環境に関わる「保育内容・環境」が3年生前期に, 「子どもと環境」が3年生後期に開講される。
- (8) 栗原泰子・野尻裕子, 2008, 前掲論文.
- (9) 上原隆司, 2020, 前掲論文.
- (10) 栗原泰子・野尻裕子, 2008, 前掲論文.
- (11) 上原隆司, 2020, 前掲論文.
- (12) 同上.
- (13) 同上.

参考文献

- (1) 榎戸裕子「継続飼育体験を通して保育学生が学んだこと」『研究紀要』(41), 2019, pp.181-196.
- (2) 亀井美弥子「保育者養成課程の学生と子どもとの保育現場における虫を通じた関わり: 幼稚園教育要領『環境』の視点から」『湘北紀要』(39), 2018, pp.61-70.
- (3) 川村高弘・永井久美子「保育専攻学生における動物と触れ合う経験が保育実践に与える影響」『神戸女子短期大学論攷』(60), 2015, pp.1-7.
- (4) 川村高弘「保育専攻学生における動物と触れ合う経験が保育実践に与える影響(その2)」『神戸女子短期大学論攷』(61), 2016, pp.19-25.
- (5) 酒井幸子「学生及び保育者の自然体験活動への苦手意識」『武蔵野短期大学研究紀要』(29), 2015, pp.159-166.
- (6) 高木義栄「保育者志望学生が子ども達に見せたい動物の移り変わりを見せたい理由」『近畿大学九州短期大学研究紀要』(49), 2019, pp.66-74.
- (7) 鶴宏史・藤本勇二・岡田朱世「生き物の飼育における保育者の意図と教育的効果—幼稚園・保育所への質問紙調査を通して—」『学校教育センター紀要』(5), 2020, pp.51-60.
- (8) 渡部美佳・細井香「保育内容(環境)教科書の実態調査—昆虫に着目して—」『一般社団法人日本家政学会研究発表要旨集』70, 2018, p.281
- (9) 渡部美佳・大澤力・小林辰至「保育者養成大学の学生に対する身近な昆虫との関わりに関する実態調査—昆虫に対する理解度と体験に着目して—」『生物教育』59(3), 2018, pp.173-179.
- (10) 文部科学省『幼稚園教育要領(平成29年告示)』フレーベル館, 2017.
- (11) 文部科学省『小学校学習指導要領解説生活編』東洋館出版社, 2017.